

国分友諒顕彰碑について（改訂稿）（第七次補正稿）

—原田弘先生のお教えに接して—

（令和 4（2022）年 8 月 6 日（土）現在）

〔目 次〕

（改訂状況）	1
（補正経緯）	1
（註記）	2
【参考文献】	3
1 はじめに	4
2 国分家墓所	7
3 国分友諒顕彰碑	8
【附録】「明治警察史コーナー」HP 項目一覧（抄）	11

（改訂状況）

- ・平成 18（2006）年 1 月 1 日（日）初稿作成
- HP 初出：・平成 19（2007）年 9 月 24 日（月）改訂稿作成
- ・平成 20（2008）年 1 月 27 日（日）改訂稿（第一次補正稿）作成
- ・平成 20（2008）年 11 月 28 日（金）改訂稿（第二次補正稿）作成
- ・平成 21（2009）年 5 月 21 日（木）改訂稿（第三次補正稿）作成
- ・平成 24（2012）年 8 月 31 日（金）改訂稿（第四次補正稿）作成
- ・平成 26（2014）年 7 月 23 日（水）改訂稿（第五次補正稿）作成
- ・令和 2（2020）年 7 月 6 日（月）改訂稿（第六次補正稿）作成
- ・令和 4（2022）年 8 月 6 日（土）改訂稿（第七次補正稿）作成

（補正経緯）

・先年坂元純瀬、国分友諒両氏の墓所について調べたことの要旨を、「坂元純瀬、國分友諒両氏の墓所について—中原英典氏のお問いかけを追って—」（初出：『警察時報』第 60 巻第 9 号（平成 17 年 9 月 1 日刊））及び「國分友諒顕彰碑について—原田弘先生のお教えに接して—」の両稿にまとめ、その後、二、三の注を付して、『高橋雄豺博士・田村豊氏・中原英典氏等略年譜・著作目録並びに『警察協会雑誌』資料一斑等—明治警察史雑纂 第二輯一』（平成 19（2007）年 3 月 1 日刊、CD 版有。）に収録したが、本稿は、そのうちの後者を更に改訂したものである。なお、前者は、先に下記のように、本 HP に掲載した（平成 19 年 8 月 7 日掲載済）。

・本 HP 別稿「坂元純瀨、國分友諒両氏の墓所について—中原英典氏のお問い合わせを追って—」〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakamoto001.pdf>〉参照。

(平成 19 年 9 月 24 日改訂稿作成)

・本文中の「國分友諒」を「国分友諒」に改めるとともに、園田安賢の記述（註 5）に関して一、二補正し、かつ、全体にわたって誤植を正した。

(平成 20 年 1 月 27 日改訂稿〈第一次補正稿〉作成)

・（註 5）中の篠崎五郎の件を修正、追加した。

(平成 20 年 11 月 28 日改訂稿（第二次補正稿）作成)

・上記（平成 19 年 9 月 24 日改訂稿作成）中に記した「國分友諒顕彰碑について—原田弘先生のお教えに接して—」中の「国分友諒顕彰碑」のみについては、今般、「再び坂元純瀨、國分友諒両氏の墓所について—中原英典氏のお問い合わせを追って—「国分君碑」—」『警察時報』第 64 卷第 6 号（平成 21 年 6 月 1 日刊）24 頁以下に収録したことを記載しておく。

(平成 21 年 5 月 21 日改訂稿（第三次補正稿）作成)

・更に、全体にわたり一、二補正を加えた。

(平成 24 年 8 月 31 日改訂稿（第四次補正稿）作成)

・更に、全体にわたり一、二補正を加えた。

(平成 26 年 7 月 23 日改訂稿（第五次補正稿）作成)

・レイアウトを変更するとともに、更に、全体にわたり一、二補正を加えた。

(令和 2 年 7 月 6 日改訂稿（第六次補正稿）作成)

・更に、全体にわたり一、二補正を加えた。

(令和 4（2022）年 8 月 6 日（土）改訂稿（第七次補正稿）作成)

（註記）（令和 4（2022）年 8 月 6 日追加）

・この間、令和 3（2021）年 5 月時点のものを「国分友諒顕彰碑について—原田弘先生のお教えに接して—」の表題で、下記に収録した。

警察政策学会警察史研究部会編『近代警察史の諸問題—川路大警視研究を中心に—』（警察政策学会資料第 114 号。警察政策学会、令和 3（2021）年 5 月 8 日刊）94～100 頁

〈<http://www.asss.jp/>〉⇒

〈<http://asss.jp/report/%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E6%94%BF%E7%AD%96%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E8%B3%87%E6%96%99114.pdf>〉

・国分友諒研究の第一人者であられた大警視川路利良研鑽会名誉会員原田弘先生（1927～2021）には、悲しい哉去る令和3（2021）年7月6日に逝去された。94歳（享年95）。謹んで御冥福をお祈りいたします。『大警視だより』続刊第15号（松井幹郎先生追悼号Ⅱ原田弘先生追悼号、通巻第44号、令和4年7月1日刊）11、12頁所載「原田弘先生の御逝去を悼みて」参照。

【参考文献】（令和2年7月6日、同4年8月6日追加）

大警視川路利良研鑽会会長加藤晶氏（1930～2019）には昨令和元（2019）年5月8日横浜市にて逝去されたが、その後、大警視川路利良研鑽会及び警察政策学会警察史研究部会では、同誌追悼として下記5冊を刊行した。

・川路利永・松井幹郎・廣瀬權等編『【CD版】加藤晶会長追悼記念 大警視川路利良関係資料集〔『大警視川路利良聖地巡礼』ガイドブック〕、『大警視だより』、『大警視だより』続刊及び『大警視川路利良関係文献集成』』（大警視川路利良研鑽会、令和元（2019）年9月1日刊）

・警察政策学会警察史研究部会編『令和元年度警察史研究部会特別調査研究報告書 近代警察史関係文献目録抄—川路大警視検討を中心に—』（警察政策学会資料・別刷。警察政策学会、令和元（2019）年10月1日刊）

・警察政策学会警察史研究部会編『近代警察史の諸問題—川路大警視研究を中心に—』（警察政策学会資料第110号。警察政策学会、令和2（2020）年5月8日刊）

〈<http://www.asss.jp/>〉⇒

〈 <http://asss.jp/report/%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E6%94%BF%E7%AD%96%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E8%B3%87%E6%96%99110.pdf>〉

・第114、115号『近代警察史の諸問題—川路大警視研究を中心に—（第二輯）武藤誠氏・加藤晶氏・福永英男氏・戸高公德氏追悼記念論集』（上、下冊、警察史研究部会編、警察政策学会、令和3（2021）年5月8日刊）

〈 <http://asss.jp/report/%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E6%94%BF%E7%AD%96%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E8%B3%87%E6%96%99114.pdf>〉

〈 <http://asss.jp/report/%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E6%94%BF%E7%AD%96%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E8%B3%87%E6%96%99115.pdf>〉

1 はじめに

国分友諒（國分友諒、1837～1877、ともさね）¹は、明治初期の有力警察幹部の一人であるが、坂元純瀨（1843～1914）²とともに、明治6（1873）年政変（同年10月24日西郷隆盛〈1827～1877〉の参議・近衛都督解任）後の同参議復職運動を巡る所謂ポリス沸騰³の当事者として知られる。この結果、翌7（1874）年1月14日の坂元、国分の二人の辞職により、大久保利通（1830～1978）に近い川路利良（1834～1879）⁴による警察体制が最終的に確立すること（同年1月15日東京警視庁発足）を考えると、明治警察史上大きな意味を有する人物であるといえる。

国分は、その後、明治7（1874）年4月、台湾出兵に徴集隊指揮副長⁵として参加するが、

¹ 中原英典「七人の大警視—坂元、国分両氏の墓所につきお尋ねをかねて—」『警察学論集』第36巻第2号（昭和58年2月刊）128頁以下参照。なお、中原英典氏につき下記サイト参照。

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nakahara001.pdf>〉（「なお」以下平成24年8月31日追加）

² 中原英典前掲論説及び同「坂元純瀨履歴一斑—明治警察史資料（2）」『警察研究』第42巻第5号（昭和46年5月刊）69頁以下参照。

³ この間の経緯については、多くの文献がある。ここでは、小説ではあるが、司馬遼太郎（1923～1996）『翔ぶが如く 2』（講談社、昭和51年2月5日刊）303頁以下（文春文庫（新装版 2、平成14年3月10日刊）284頁以下。ただし、司馬氏の国分の描き方の出所は不明。例えば、『西南記伝』（上巻一）（黒龍会本部、明治41年12月3日刊）（第三篇 征蕃の役（517頁以下）参照。（平成26年7月23日一部補正））、また、ネット関係資料として田村貞雄（1937～2020）「桐野利秋談話（一名桐陰仙譚）について」〈<http://www1.vecceed.ne.jp/~swtamura/kirino.htm>〉（当初のサイト）⇒〈<http://members2.jcom.home.ne.jp/mgrmhosw/kirino.htm>〉（平成26年7月23日確認）を挙げるにとどめる。本ネット資料の扱う時期の問題に関しては、例えば、大日方純夫（1950～）『日本近代国家の成立と警察』（校倉書房、平成4年11月25日刊）、高橋秀直（1954～2006）「明治維新の朝鮮政策—大久保政権期を中心に—」山本四郎（1920～）編『日本近代国家の形成と展開』（吉川弘文館、平成8年10月1日刊）44～49頁、勝田政治（1952～）『内務省と明治国家形成』（吉川弘文館、平成14年2月1日刊）等参照。なお、ここに「ポリス」とは「警保寮」を指すようである。

⁴ 本HP別稿「大警視川路利良関係文献抄—『警察手眼』検討を中心として—（改訂稿）」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kawaji001.pdf>〉、

同「川路大警視青山墓前の頌徳碑検討一斑（碑文全文、付句読点文、書下し文）—故陸軍少将兼大警視正五位勲二等川路君墓表編修副長官従五位重野安繹撰— 明治警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kawaji002.pdf>〉各参照。

⁵ 指揮長は坂元純瀨、もう一人の指揮副長は、篠崎五郎（1847～1909）である。篠崎の妹テツ（1853～1906）は、後の警視總監園田安賢（1850～1924）夫人である。中原英典「園田安賢履歴ノート（上）—続・明治警察史資料（3）」『警察研究』第49巻第6号（昭和53年6月刊）27頁には、篠崎の二女とあるが、正しくは妹である（後掲日高節「安立綱之翁叢談 其1」『自警』昭和10年1月号132頁参照。）。篠崎五郎につき、国立国会図書館近代デジタルライブラリー〈<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>〉（その後国立国会図書館デジタルコレクション〈<https://dl.ndl.go.jp/>〉）中の大岡力『地方長官人物評』（長島為一郎、明治25年10月刊）、大植四郎（1896～?）『明治過去帳 物故人名辞典』（昭和10年12月25日

帰国後、私学校党との間で相容れざるところあって、再び上京し、同8年川路の好意で警察に復帰するが、西南戦争中の明治10（1877）年4月3日に熊本県下益城郡中央村堅志田（かたしだ）で、戦死した⁶。

後に内務省警保局長、第15代警視總監、貴族院議員となる安立綱之（国分彦七、1859～1939）⁷は、実弟に当たる。同氏の「安立綱之翁叢談」は、国分のことを知り得る最良の資料である⁸。加えて、大浦兼武（1850～1918）⁹との関係にも留意すべきである¹⁰。

原著私家版刊。東京美術、昭和46年11月20日新訂初版刊）1123頁等参照。なお、本HP別稿「篠崎五郎関係資料抄—台湾出兵時の徴集隊指揮副長の一人— —明治警察史の一齣—」
(<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shinozaki.pdf>)をも参照。（本註5：平成20年1月27日補正、平成20年11月28日再補正、平成24年8月31日再々補正。）

⁶ 国分の戦死については、川村艶吉『川路利良公伝』（文会堂、明治12年10月18日刊）5丁表、『西南戦闘日注並附録』1（明治17年1月刊。日本史籍協会編（続日本史籍協会叢書）、東京大学出版会、昭和51年12月25日覆刻）緒言1頁29、30頁、同2（同、昭和52年2月25日覆刻）342頁、『征西戦記稿』上（陸軍文庫、参謀本部編、明治20年5月20日刊）卷二十二「衝背軍戦記」（「宇土並ニ堅志田ヲ取ル事」）等がある。なお、上記『征西戦記稿』の簡略現代語訳版である旧参謀本部編纂、桑田忠親・山岡荘八監修『維新・西南戦争』（徳間書店、昭和52年4月10日刊）148頁参照。

⁷ (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%89%E7%AB%8B%E7%B6%B1%E4%B9%8B>)
高橋雄豺「明治年代の警保局長（15）安立綱之」『警察学論集』第23巻第8号（昭和45年8月刊。後に、同『明治警察史研究』第4巻〈後編—明治年代の警保局長一、令文社、昭和47年7月10日刊〉516頁以下に収録。）。なお、高橋博士につき、下記サイト参照。

(<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/takahashi001.pdf>)（「なお」以下平成24年8月31日追加）
⁸ 「安立綱之翁叢談」は国分友諒関係資料としても貴重なものである。全体として極めて興味深いものであるが、現在では何故かなかなか実見が難しいことから、参考までに『自警』掲載各号の表題のみではあるが記載しておくこととする。ちなみに、著者日高節（みさお）は、『勝海舟遺稿』（詳細不明）、『明治秘史 西郷隆盛暗殺事件』（隼陽社、昭和13年7月1日刊）及び『維新経国秘録 海舟と南洲』（大日本皇道奉賛会、昭和19年3月20日刊）の著者であるが、鹿児島県喜入村出身で上記『維新経国秘録』奥付頁記載の「著者略歴」には「維新史料編纂官、故勝田孫彌氏〔1867～1941〕編輯所主幹」とある。この他、安立綱之「大警視のお蔭」中村徳五郎『川路大警視』（日本警察新聞社、昭和7年10月1日刊）347頁参照。

日高節「安立綱之翁叢談」（『自警』昭和10（1935）年1～4、6、7月号（巻号数未調査）所載）（参考：全28頁、ただし『自警』昭和10年5月号には掲載なし。）

西南の役に戦没した陸軍少佐兼権少警視国分友諒のことども（上）

—安立綱之翁叢談・其一—（『自警』昭和10年1月号所載）

西南の役に戦没した陸軍少佐兼権少警視国分友諒のことども（下）

—安立綱之翁叢談・其二—（『自警』昭和10年2月号所載）

古代武士の典型 養父安立利綱の思ひ出（上）

—安立綱之翁叢談・其三—（『自警』昭和10年3月号所載）

養父安立利綱の思ひ出（下）と私の書生時代の追憶（上）

—安立綱之翁叢談・其四—（『自警』昭和10年4月号所載）

明治七年の征台軍に参加した頃の私の書生時代の追憶（下）

—安立綱之翁叢談・其五—（『自警』昭和10年6月号所載）

私の書生時代・好機 明治三十八年帝都騒擾事件を顧みて

—安立綱之翁叢談・其六—（『自警』昭和10年7月号所載）（令和4年8月6日一部補正、追加）

⁹ (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%B5%A6%E5%85%BC%E6%AD%A6>)（平成24年8

国分友諒については、夙に中原英典（1915～1979）氏に前掲「七人の大警視一^{ママ}阪元、国分両氏の墓所につきお尋ねをかねて一」（遺稿、まえがき 渡辺忠威）『警察学論集』第36巻第2号（昭和58年2月、昭和54年8月脱稿の由）があつて、そこで、中原氏がその墓所の所在地を問いかけていたが、その後、原田弘先生（1927～1921）が、杉並区大円寺¹¹に所在することを見つけられ、平成5（1993）年に至り、国分の顕彰碑を紹介された（原田弘「杉並の名墓（42）」『杉並郷土史会報』第120号（平成5年7月25日刊）参照。）¹²。

以下、これらに基づき、その一端を誌しておくこととしたい。国分友諒検討の一助ともなれば幸いである¹³。

書下し文の作成及び碑文を書いた長茨（1833～1895、ちょう・ひかる）¹⁴のことについて

月31日追加)

¹⁰ 野村本之助「大浦卿の一外伝」『大浦兼武伝』（大浦氏記念事業会、大正10年10月1日刊301～310頁参照。大浦の妻は安立の妻の姉で、国分が縁を取り持っている。なお、野村が国分友諒の処に下宿していたことについて、高橋雄豺・中原英典（対談）「日本警察の歩みを語る（その1）—明治警察史研究を中心にして」『警察研究』第45巻第9号（昭和49年9月刊）116、121頁参照。

¹¹ 大円寺：泉谷山、曹洞宗、杉並区和泉3-52-18、本尊は釈迦如来坐像。1603年赤坂溜池に開創、開基は徳川家康。開山は武田信玄の弟、諦庵桂察和尚。1641年焼失、芝・伊皿子に移転、ここで薩摩藩島津家の菩提寺となる。明治41（1908）年、現在地へ移転。山門を入ると右は墓所、左は本堂。本堂の右に庫裏、国分の墓は庫裏のすぐ右手奥。

〈https://tesshow.jp/suginami/temple_izumi_daien.html〉

¹² 国分友諒の墓所について、中原英典氏は、元は東京・谷中墓地にあつて、後に杉並区永福町付近に移したと聞くということを述べ、その所在地の教示を求めていた（前掲中原論説138頁。ただし、その出所は不明。）。原田弘先生は、『MPのジープから見た占領下の東京 同乗警察官の観察記』（草思社、平成6年12月刊）の著者であるが、警察史研究に加え、早くから杉並郷土史会でも活躍されている（現在は会長とお聞きする。）。平成17（2005）年6月18日（土）原田先生に、国分友諒の墓所発見の経緯について改めてお尋ねしたところ、明治法制史研究の泰斗で中原英典氏や原田先生御自身とも親しい関係にあった元慶応義塾大学名誉教授手塚豊博士（1911～1990）より、国分の墓所が杉並区にある可能性を聞かれて、「同区内の古い寺、島津家と縁のある寺」という観点から探索し、遂に大円寺にあることを突き止められたことについて、親しく御示教下された。敬服にたえない次第である。なお、原田先生は、平成17年8月10日（水）夜NHK教育TV「知るを楽しむ 何でも好奇心（工藤美代子（1950～））TOKYO1945」（同年8月中に数回放映）に、ゲスト出演され、マッカーサー警護の思い出を語られた。その後、同先生は、『ある警察官の昭和世相史』（草思社、平成23年12月16日刊）をも刊行された。（「その後」以下、平成24年8月31日追加）

¹³ 本稿は、まず『鷲巢敦哉とその時代（続々輯）〔特別収録1〕：『鷲巢敦哉著作集』補遺続集（第二輯）、〔特別収録2〕：戴炎輝博士略年譜・著作目録（三訂稿）—日本統治下台湾警察史雑纂第六輯—』（平成18（2006）年1月1日刊）に掲載したが、その後、『高橋雄豺博士・田村豊氏・中原英典氏等略年譜・著作目録並びに『警察協会雑誌』資料一斑等—明治警察史雑纂 第二輯—』（平成19年3月1日刊、CD版有。）にも、一、二字句を改めた他は、ほぼそのまま再録した。なお、これらにつき、同輯118、119頁掲載の「坂元純濤、國分友諒両氏の墓所について—中原英典氏のお問い合わせを追って—」（本HPにも別稿として掲載。〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakamoto001.pdf>〉）をも参照。

ては、今回もまた高橋均先生の御懇篤な御教示を忝うした。加えて、台湾の梁添盛博士にもいろいろお教えいただいた。原田先生、高橋先生及び梁博士の御高配に、深甚の謝意を表するものである。

2 国分家墓所

国分家の墓所は、杉並区和泉 3-52-18 所在曹洞宗大円寺にある。同寺は、江戸時代島津家の菩提寺で、芝・伊皿子にあったが、明治 41（1908）年に現在地に移転している。国分家のものとしては、友諒、母及び妻三名の 1 基の墓石とともに、古い墓石が 2 基及び長茨の書になる「国分君碑」なる顕彰碑がある。その概況は、次のとおりである。

なお、上記「国分君碑」によれば、同碑は当初東京谷中天王寺に建てられたとあり、中原英典氏も、上記論説中で、墓石とともに、杉並区内に移されたといわれているが、その出所の明記がなく、これら顕彰碑、墓石の移転状況等ははっきりしない¹⁵。

(1) 墓地概況（構図）

国分君碑

国分友諒・母・妻墓

小石塔 (1)

国分家墓 (1)

小石塔 (2)

国分家墓 (2)

(2) 国分友諒・母・妻墓（原文:縦書、改行のとおり）

¹⁴ 長（姓）三洲（号）主馬、茨（光）、富太郎、光太郎が名、豊後日田の出身、明治 28（1895）年没。享年 63。本姓は長谷氏。『大分県人物誌』（大分県教育委員会編、歴史図書社、昭和 51 年 2 月 28 日刊。『増補改訂大分県偉人伝』（大分県教育会編、昭和 3 年版）の改題復刻版、初版は明治 40 年刊）494～497 頁、関儀一郎・関義直編『近世漢学者伝記著作大事典』（東京・井田書店、昭和 18 年 6 月 10 日刊。東京・琳瑯閣書店・井上書店発売、昭和 46 年 4 月 10 日第三版刊）321 頁、長澤規矩也監修・長澤孝三編『漢学者総覧』（汲古書院、昭和 54 年 12 月刊）191 頁等各参照。なお、長の女齡子（1870～？）は大森鍾一（1856～1927）の継室である（『大森鍾一』（池田宏、昭和 5 年 3 月 3 日刊）56、275 頁）。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E4%B8%89%E6%B4%B2>

¹⁵ 国分の墓所について、そもそも最初から大円寺にあったか否かは不明である。すなわち、上述のように、中原英典氏は最初東京・谷中墓地にあって、後に杉並区永福町付近に移したと聞くと述べている。加えて、顕彰碑（国分君碑）には、同碑は谷中・天王寺に建てられたとある。他方、大円寺は、江戸時代島津家の菩提寺で、芝・伊皿子にあったが、明治 41（1908）年に杉並区の現在地に移転している。これについては、宮之城・島津家出身の国分の妻常子（ツネ、同氏については前掲日高節「安立綱之翁叢談」〈其の 1、2〉参照。）が、同じ明治 41 年の 3 月 29 日に逝去していることから、あるいは、その時にあわせて移したのか。こうしたことも考慮に入れて、考える必要があるのかも知れない。尤も大円寺にお聞きできれば、わかることであろうが、取りあえず記しておく。

(墓碑正面)

陸軍少佐兼

正七位 国分友諒之墓

権少警視

母 喜多子之墓

妻 常子之墓

(墓碑裏面)

明治十年四月三日於熊

本県下堅志田之役戦死

于時年四十一

同年十二月建之

母喜多子同三十四年

十二月二十五日歿 享年八十四歳 〈ママ〉

妻常子明治四十一年三月廿九日歿

享年六十歳 〈ママ〉

(3) 国分家墓 (1)

(正面) (家紋) 徹俊祖長居士

(右面) 薩洲

国分長次郎惟宗友春

(左面) 天明六年丙午 (天明六年: 1786 年)

十二月十七日

(裏面) (なし)

(4) 国分家墓 (2) (□は不明字)

(正面) 寛保三□亥年 (寛保三: 1743 年)

覚□玄□居士

十月□六日

(右面) 薩洲

国分市郎右衛門友智

(左面) (なし)

(裏面) (なし)

3 国分友諒顕彰碑

(1) 原文 (原文: 旧字、縦書、碑文のままに改行。)

国分君碑 (篆額: 右より左へ)

国分君諱友諒初称新太郎又莊之丞薩摩人父一郎右衛門母鷺頭氏君性直実有武幹明治元年奥羽之役以小隊監軍有功賜禄四年官徵募東京府下邇卒君率藩士千人応之尋任東京府権大属五年進大属転邇卒権総長累遷大警視兼司法権中検事七年辞職帰台湾之役以徵集兵指揮副長撃石門蕃再入東京補警視庁八等出仕八年任権少警視叙正七位十年二月薩賊作乱天兵征討君率巡查数百人自肥後八代進三月任陸軍少佐為別働第三旅団第二大隊長四月三日賊乘曉霧襲我堅志田營君指揮部伍叱咤奮戦賊潰走会有飛丸中面斃享年四十一葬於八代横手邨君娶島津氏有一男三女男吉之助女日峯日政日坂友人富沢僚等相謀樹碑於東京谷中天王寺乃紀文以表之云

明治十一年六月建 従五位長茨篆額并書

(裏面には、碑文建立賛同者富沢僚、中原尚雄等 522 人〈数字は原田弘前掲「杉並の名墓(42)」による。〉の名が刻まれている。)

(2) 付句読点文

国分君碑 (右より左へ)

国分君、諱友諒、初称新太郎、又莊之丞、薩摩人。父一郎右衛門、母鷺頭氏。君性直実、有武幹。

明治元年、奥羽之役、以小隊監軍有功、賜禄。

四年、官徵募東京府下邇卒、君率藩士千人応之。尋任東京府権大属。

五年、進大属、転邇卒権総長、累遷大警視兼司法権中検事。

七年、辞職帰。台湾之役、以徵集兵指揮副長、撃石門蕃。

再入東京、補警視庁八等出仕、八年、任権少警視、叙正七位。

十年二月、薩賊作乱、天兵征討、君率巡查数百人、自肥後八代進。

三月、任陸軍少佐、為別働第三旅団第二大隊長。

四月三日、賊乘曉霧襲我堅志田營。君指揮部伍、叱咤奮戦、賊潰走。会有飛丸、中面斃、享年四十一、葬於八代横手邨。

君娶島津氏、有一男三女、男吉之助、女日峯、日政、日坂。

友人富沢僚等相謀、樹碑於東京谷中天王寺。乃紀文以表之云。

明治十一年六月建 従五位長茨篆額并書

(3) 書下し文

国分君の碑

国分君、諱は友諒、初め新太郎、又莊之丞と称す、薩摩の人なり。父は一郎右衛門、母は

鷲頭氏。君、性直実にして、武幹有り。

明治元年、奥羽之役に、小隊監軍を以て功有り、禄を賜う。

四年、官、東京府下の邏卒を徵募するに、君、藩士千人を率いて之に応ず。尋（つい）で東京府権大属に任ぜらる。

五年、大属に進み、邏卒権総長に転じ、大警視兼司法権中検事に累遷す。

七年、職を辞して帰る。台湾之役には、徵集兵指揮副長を以て、石門蕃を撃つ。

再び東京に入りて、警視庁八等出仕に補せられ、八年、権少警視に任ぜられ、正七位に叙せらる。

十年二月、薩賊乱を作（な）し、天兵征討するに、君、巡查数百人を率い、肥後八代より進む。

三月、陸軍少佐に任ぜられ、別働第三旅団第二大隊長たり。

四月三日、賊、暁霧に乘じ、我が堅志田營を襲う。君、部伍を指揮し、叱咤奮戦すれば、賊潰走す。会（たまたま）飛丸有り、面に中（あた）りて斃る、享年四十一、八代横手邸に葬らる。

君島津氏を娶り、一男三女有り、男は吉之助、女は曰く峯、曰く政、曰く坂なり。

友人富沢憭¹⁶等相謀りて、碑を東京谷中天王寺に樹つ。すなわち文を記（紀）し、以て之を表し（しか）云う。

明治十一年六月建 従五位長苙¹⁷篆額あわせ書

(4) 参考書下し文（「安立綱之翁叢談」（其の2）81頁による。）

（ここでは、原文が記載されず、書下し文のみが掲載されている。括弧内・傍線個所は、上記「(3) 書下し文」と異同のあるものを示す。「(1) 原文」に基づく「(3) 書下し文」が正しいかと思われる。）

¹⁶ 富沢憭については詳細不明であるが、同氏は、例えば、明治5（1972）年8月24日東京府邏卒の司法省移管時点では、第一大区（新場橋向坂本町）少属である。なお、同大区の邏卒総長は安藤則命（1828～1909）である。高橋雄豺『明治警察史研究』第4巻（前編—明治年代の警保局長—、令文社、昭和47年7月10日刊）49頁。「国分君碑」裏面の建立発起人の第一列に富沢及び中原尚雄（1845～1914、西南戦争時に有名な中原少警部、後福岡県警部長）の名あり。富沢は明治26（1893）年頃には警視で京橋警察署長であるようであるが、詳しいことは、今後の課題である。

¹⁷ 長苙（1833～1895、ちょう・ひかる）に関する最近の著作としては、中島三夫編著『三洲長苙著作選集 付作品目録・略伝』（中央公論事業出版、平成15年12月25日刊、B5判 224頁 定価12,600円（本体12,000円））がある。本書は、同事業出版のネット広告によれば、以下のとおりである。ただし、同書には、国分友諒の頌徳碑のことは漏れており、長と国分の関係も不明である。「長苙は、日田、廣瀬淡窓の開いた咸宜園で秀才の名を欲しいままにした明治維新の志士であり、書家としても知られるが、明治学制起草の中心的な功労者でもある。しかし、その人となりや功績についてはあまりにも知られておらず、正当な評価を受けていない状況にある。長らく三洲の著書、書画、碑文を求め研究を続けてきた著者が、三洲の全貌を明らかにするべく、これまでの成果をまとめた。三洲の伝記、系図、論文・紀行文、書翰、書画・碑文・扁額等一覧、関係文献一覧、年譜、篆刻・印譜、本人の住所録、さらに明治6年に文部大丞として学区巡察した時の日記などを収録している。16頁カラー口絵、機械函入り。」

国分君碑（原漢文和文に訳す）

国分君諱ハ友諒。初め新太郎又莊之丞（丞）ト称ス。薩摩ノ人。父ハ一郎右衛門。母ハ鷲頭氏。君性直実ニシテ武幹有リ。明治元年奥羽之役。小隊監軍ヲ以テ功有リ禄ヲ賜フ。四年官東京府下邇卒ヲ徵募ス。君藩士千人ヲ率キテ之ニ応ズ。尋（ツイ）デ東京府権大属ニ任ジ五年大属ニ進ム。邇卒権惣（総）長ニ転ジ大警視兼司法権中検事に〈ママ〉累遷ス。七年職ヲ辞シテ帰ル。台湾之役。徵集兵指揮副長ヲ以テ石門蕃ヲ撃ツ。再ビ東京ニ入り警視庁八等出仕ニ補ス。八年少（権少）警視ニ任ジ、従七位（正七位）ニ叙セラル。十年二月薩賊乱ヲ作（ナ）ス。天兵征討。君、巡查数百人ヲ率キテ肥後八代ヨリ進ム。（三月：欠落）陸軍少佐ニ任ジ別働第三旅団第二大隊長ト為ル。四月三日賊曉霧ニ乗ジテ我が〈ママ〉堅志田營ヲ襲フ。君部伍ヲ指揮シテ、叱咤奮ヒ戦ヒ賊潰走ス。会（タマタマ）飛丸有リ。面ニ中（アタ）リテ斃ル享年四十一。八代横手邨ニ葬ル。君島津氏ヲ娶リ一男三女有リ。男ハ吉之助。女ハ峯ト曰ヒ政ト曰ヒ坂ト云（曰）フ。友人富（富）沢僚等相謀リ碑ヲ東京谷中天王寺ニ樹ツ。乃チ文ヲ紀シ以テ之ヲ表スト云フ。

明治十一年六月建

従五位長茂（茂）篆額並書（原文は「明治」以下は一行である。）

（追記）

國分友諒の墓所につき、その後、下記の著作が出た。

・河内貞芳（1977～）『侍たちの警視庁 大警視川路利良の時代』（自己出版、平成 24 年 6 月 10 日刊。前著『侍たちの警視庁』（自己出版、平成 19 年 1 月 7 日刊）の改訂版。）21 頁（平成 24 年 8 月 31 日追加）

〈<http://kawachisoutai.chu.jp/keishi1.html>〉

【附録】「明治警察史コーナー」HP 項目一覧（抄）（令和 4（2022）年 8 月 6 日追加）

〔既存「（参考）本 HP 関係別稿一覧（平成 24 年 8 月 31 日追加、令和 2 年 7 月 6 日一部補正）」を差し替えた。〕

・「法制史学者著作目録選」中「明治警察史コーナー」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

・「松井茂久『警官陶冶篇』研究史抄一本 HP 収載「PDF 版松井茂久『警官陶冶篇』」検討資料」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/matsui002.pdf>〉

・「PDF 版松井茂久『警官陶冶篇』（増訂三版、明治 25（1892）年 2 月 18 日刊）」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/matsui001.pdf>〉

・「大森鍾一『直興遺篋抄』—「長男仕官に就き与へたる訓戒の書」—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/omori001.pdf>〉

・「川路大警視青山墓前の頌徳碑検討一斑（碑文全文、付句読点文、書下し文）—故陸軍少将兼大警視正五位勲二等川路君墓表編修副長官従五位重野安繹撰— 明治警察史の一齣

—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kawaji002.pdf>〉

- ・「佐和正関係文献抄—明治警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sawatadashi.pdf>〉

- ・「坂元純濤、國分友諒両氏の墓所について—中原英典氏のお問いかけを追って—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakamoto001.pdf>〉

- ・「国分友諒顕彰碑について（改訂稿）—原田弘先生のお教えに接して—」（本稿）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kokubukenshoji.pdf>〉

- ・「篠崎五郎関係資料抄—台湾出兵時の徴集隊指揮副長の一人— —明治警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shinozaki.pdf>〉

- ・「高橋雄豺博士著作目録（再訂稿）」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/takahashi001.pdf>〉

- ・「田村豊氏著作目録」（平成26年8月31日追加）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/tamura001.pdf>〉

- ・「中原英典氏明治警察史研究関係著作目録抄（参考）渡辺忠威氏警察史関係文献抄」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nakahara001.pdf>〉

（了）